



日本イスタニヤ学会「会報」

Boletín de la Asociación Japonesa de Hispanistas

第29号 (2022年10月1日) / Núm. 29 (1 de octubre de 2022)

日本イスタニヤ学会事務局

〒170-0013 東京都豊島区東池袋 2-39-2-401

(株)ガリレオ 学会業務情報化センター内

Tel: 03-5981-9824 Fax: 03-5981-9852

e-mail: g004esp-mng@ml.gakkai.ne.jp

(<http://www.gakkai.ne.jp/ajh/>)

広報委員会「会報」編集部

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1

立命館大学産業社会学部

仲井邦佳 宛

Tel: 075-466-3148

e-mail: knakai@ss.ritsumei.ac.jp

目次

【巻頭言】

山村ひろみ 日々のつれづれ…………… 2

【追悼】

1. 福嶋教隆 高橋覚二博士のスペイン語研究について…………… 3

2. 角田哲康 高橋覚二先生一縮小辞への思い…………… 5

【エッセイ】

1. Motoko HIRAI, Andrés PÉREZ, Paula LETELIER y Takeshi KAKIHARA
Efectos de los programas de estudio de español en línea de corta duración
en universidades del mundo hispanohablante…………… 7

2. Beatriz PRIETO MUÑOZ
Reflexión sobre la enseñanza del español en los años de pandemia…………… 9

3. 長縄祐弥 saberからconocerへ…………… 11

4. 豊平太郎 アプロフォビアあるいは貧困者に対する嫌悪について…………… 12

【書評】

1. 安保寛尚 仁平ふくみ『もうひとつの風景 フアン・ルルフォの創作と技法』
(春風社、2022年)…………… 14

2. 花方寿行 ロドリゴ・フレサン『ケンジントン公園』
(内田兆史訳、白水社、2022年)…………… 16

3. 斎藤文字 Elia Saneleuterio y Mónica Fuentes Del Río (eds.), *Femenino singular*
Revisiones del canon literario iberoamericano contemporáneo
(Ediciones Universidad Salamanca, 2021)…………… 17

4. 穂原三佳、福嶋教隆、成田瑞穂、野村竜仁
Hidehito Higashitani, *La flor del ciruelo y la rosa azul*
(Zaragoza: Pressas de la Universidad de Zaragoza, 2021)…………… 19

5. 駒井睦子 シルピナ・オカンボ『蛇口 オカンボ短篇選』
(松本健二訳、東宣出版、2021年)…………… 21

6. 福地恭子 田辺加恵・大原志麻・井上幸孝『聖ヤコブ崇敬とサンティアゴ巡礼
—中世スペインから植民地期メキシコへの歴史的つながりを求めて—』
(春風社、2022年)…………… 23

【学会等報告】

1. 松井健吾 東京スペイン語学研究会
——最近10年間の活動を振り返って——…………… 24

2. 木下 亮 バルセロ、ミロ、ボテロ ～生命の根源からの造形～…………… 26

【新刊案内】(2021年6月～2022年5月)…………… 29

【2022年度日本イスタニヤ学会奨励賞】…………… 31

【『HISPÁNICA』編集委員会より】…………… 31

【理事会より】…………… 32

【編集後記】…………… 32

【巻頭言】

日々につれづれ

山村 ひろみ

この原稿を書いている2022年8月18日現在、今年の2月24日に何の前触れもなく始まったロシアのウクライナ侵攻はいまだ終結していない。まさか21世紀になってこのような事態が起こると誰が想像しただろう。少なくとも、私にとってこのウクライナ戦争は大変な衝撃であった。確かに、第二次世界大戦後、戦争はあった。朝鮮戦争、ベトナム戦争、数次にわたる中東戦争、イラン・イラク戦争、アフガン戦争、湾岸戦争。テレビのニュースが地球上のどこかで起こっている戦争、紛争を報じなかった日はない。それにも拘わらず、このウクライナ戦争にショックを受けたのはなぜか。それは、前世紀の戦争とは異なり、21世紀の戦争では、誰もがSNSなどを通してその首謀者たちの一挙手一投足、兵隊たちや民間人たちの日常をつぶさに観ることができるからではないか。ロシアの大統領は、ナチ化されたウクライナを非ナチ化するためにウクライナに侵攻したという。しかし、私たちはウクライナの大統領がユダヤ系であることを知っている。また、ロシアの軍人は、ウクライナの学校を破壊した爆弾はロシアではなくウクライナのものであるという。しかし、専門家にとって、その爆弾がどこから発せられたものかを確認するのは何ら難しいことではない。さらに、ロシアの高官は何万いや何十万ものウクライナ人がロシアに避難したという。しかし、私たちはそのウクライナ人たちの顔つきを知っている。みんな疲れ切り、諦めた表情だ。つまり、21世紀の戦争はみなに知られてしまうのだ、いいことも悪いことも、嘘も本当も。このように、私たちはたった20余年の間に20世紀とは全く異なる世界に生きることになった。それなのに、戦争の当事者たちの頭の中は前世紀のままで領土争いに明け暮れる。いったい私たちは何をしていたのか。家を失い、愛する人を失い、希望を失った人々に私たちはいったい何をすることができるのか。

また、早2年にもなるコロナ禍もいまだ終息していない。マスク配付、緊急事態宣言発出、まん防（まん延防止等重点措置）の実施、ワクチン接種の薦めなど、思えばこれまでにさまざまな策が実行されてきたが、コロナの「波」は以前続いている。いったい私たちはどこで間違ってしまったのだろうか。

そんなことをぼんやり考えていたとき、私が日本イスパニヤ学会の会長に選出されたという知らせを受けた。驚き以外の何物でもなかった。私のような者が本学会の会長になると聞けば、私を知る恩師や諸先輩は一笑に付すに違いないからである。しかし、そのような私が本学会の会長に選ばれたのも、私が漠然と思いをめぐらしていたこの時代、私たちが生きているこの時代と無縁ではなかった。会員のみなさんは、今回の会長選出が通常よりも時間がかかっていたことにお気づきだろうか。それは理事に選出され、そのままであれば当然会長になっていたはずの方が次々と理事をご辞退なさったからである。問題はその辞退の理由である。ある人は家族の介護のため、また、ある人は子育てのためということだった。これらはまさに現代日本社会が抱える問題そのものではないか。つまり、私のような者に会長のお鉢が回ってきたのも21世紀の問題のためと言えるのである。

現代は複雑かつ難しい、先の予想がつかない時代である。しかし、だからと言って、私まで会長を辞退するわけにはいかないだろう。その理由が何であれ、会長になったからには日本イスパニヤ学会を盛り立てていくために微力ではあるができる限りのことをするつもりで

ある。会員みなさんのご協力をお願いする次第である。

(やまむら・ひろみ 会長、九州大学教授)

【追悼 1】

高橋覚二博士のスペイン語研究について

福嶋 教隆

1

本学会元会長、南山大学名誉教授 ^{たかはしかくじ} 高橋覚二（覚二）先生が 2022 年 4 月 27 日に永眠された。享年 78。同日、瑞宝中授章を受賞。スペイン語意味論、統語論、語彙論において緻密な記述と重要な提言を数多く行い、日本のスペイン語学、スペイン語教育を大きく前進させた偉大なイスパニスタだった。温厚誠実で思いやりがあり、かつ謙虚なお人柄で、万人から敬愛された。

先生は神戸市外国語大学をご卒業後、東京外国語大学大学院修士課程に進まれた。1975 年にはサラマンカ大学で学位を取得し、doctor en filosofía y letras となられた。南山大学で教鞭をとられ、また 2006～2008 年には会長として本学会を導かれた。

先生は、本学会機関誌 *Hispanica*、南山大学紀要『アカデミア』、関西スペイン語学研究会機関誌 *Linguística Hispanica* を中心に、数十編の研究論文を發表された。この 3 種の逐次刊行物すべてに寄稿された年もあった。海外の学会でも精力的に發表された。これらの論文類で得られた研究成果は、ご著書『現代スペイン語辞典』（白水社、共編、1990）、『テーブル式基礎スペイン語便覧』（評論社、1993）、『スペイン語表現ハンドブック』（白水社、1998）、『スペイン語の世界』（世界思想社、共著、1999）をはじめとする、辞書、参考書、単語集、教科書に反映されている。

2

高橋先生のご研究のテーマは、次のように多岐にわたっている。① 前置詞。② 語義、語法の記述。③ 類義語。④ 動詞時制の体系。⑤ 基本語彙の選定。⑥ コンピュータとスペイン語教育。

①は、サラマンカ大学に提出された博士論文"La preposición *a* en español" (指導教官は Antonio Llorente Maldonado 博士) や、1978～1997 年にわたって南山大学の『アカデミア』に發表された「スペイン語前置詞の活用 (1)～(14)」など、ご研究の起点を成す分野である。

②については、「関係詞と接続詞 : como の場合」(『アカデミア 文学・語学編』32 号、1982) のように、定説を鵜呑みにせず、実例の分析に基づいて説得力のある結論を導く論考が見られる。

③は先生のご研究の特質が最もよく表れた分野である。querer, desear, tener ganas などの願望動詞や, llegar と venir, volver と regresar のような類義語の使い分けの原理が明らかにされる。1996 年に發表された「ojalá あるいは que に先行された願望文」(『原誠教授退官記念論文集』所収) は、表題の 2 つの願望文の間には、「不確実性」を積極的に示すか否かという歴然とした違いがあることを示す。たとえば、見舞いの言葉として Que te mejores pronto. という表現はよく使われるが、Ojalá (que) te mejores pronto. は適切ではない。母語話者は無意識のうちにこの差を感じて使い分けているのだが、スペイン語圏の研究者は両者を同義と見なして事足れ

りとする場合が多い。高橋先生の論文は、「誰もが知っていながら、指摘されるまで専門家でさえ気づかない」コロンブスの卵のような問題を解明した、大きな学術的貢献である。

④では、未来形と過去未来形の本義は「未来時」ではなく「推量」を表わすことであるという主張が特筆される。論文「効率的なスペイン語教育のための動詞体系」(*Hispanica* 31, 1987)は、この主張を教育にも取り込もうとする試みである。

⑤は「スペイン語教育基本語彙と語学力の関係」(『アカデミア 文学・語学編』43, 1987)などで論じられる。先生は、外国語の運用能力を高めるには語彙の習得が極めて重要である、との立場から、基本語彙の選定を多年にわたって続けられた。

⑥については、「パソコンを教具としたスペイン語教育のひとつの試み」(*Hispanica* 38, 1994)を皮切りに、いくつもの論文で、新しい教育方法についての提案を行われた。

先述のとおり、これらの研究で得られた成果はご著書に反映され、私たち読者へと還元されている。たとえば③で述べた願望動詞の使い分けの分析は、『スペイン語表現ハンドブック』p. 68の「願望 (...したい、...してみたい、...したがっている)」の項目となって結実している。また、④の「時制を過去、現在、未来の3つに区分しない」立場は、『テーブル式基礎スペイン語便覧』pp. 96~97の「45. 動詞の法と時制」で時制を「過去と非過去」の2つの系列として捉える説明方法へとつながっている。

3

高橋先生の研究姿勢は、上記の②であげた論文「関係詞と接続詞：comoの場合」の次の一文に端的に示されている。

「言語においては、ひとつの要素の具体的な価値は、他の要素と結びついてはじめて出てくる」(同論文 p. 91)

即ち「語や句は、文の中に置かれてこそ、その機能を発揮する」という、この観点をもとに、おびただしい実例を1つ1つ、伝統文法に構造主義を加えた手法で丁寧に解きほぐしていかれた。言語理論の流行に左右されることなく着実に積み重ねられた記述と分析は、今日一層その価値を増している。

先生は、他の研究者がご自分の研究成果や蔵書を利用することについて、極めて寛大であられた。本学会の機関誌 *Hispanica* は現在 J-Stage の手によって電子公開されているが、これは、先生が、ご所蔵の創刊号から当時の最新号に至る全巻を、学会に快く貸与してくださったのが起点である。また、南山大学のウェブサイトにも先生が公開しておられた「スペイン語文法用語集」は、詳しい解説や的確な事例を伴う資料で、多くの大学院生や若手研究者の勉強の拠りどころとなっていた。現在はアクセス不可能なこの資料は、何らかの形で公開が望まれる。

ご家族を大切にされることや大の愛犬家で知られる、物静かな高橋先生は、時に研究会の会場にバイクで駆けつけてこられるといった、お茶目な一面も持っておられた。平素は一步一步堅実に研究を進めながら、時期を得れば、いわば「ブッチギリ」の成果を出して学問の走行距離を伸ばす先生の研究パターンには、ひょっとするとバイクが絡んでいるのかもしれない。

高橋覚二先生、本当にありがとうございました。私たちは、先生が遺された成果を活かしつつ次の一步を踏み出します。どうぞ安らかに眠りください。

(ふくしま・のりたか 神戸市外国語大学名誉教授)

*小文をしたためるにあたって、高橋先生の奥様、美也子様からご教示をいただきました。

また、筆者は、2022年7月16日にオンライン開催された関西スペイン語学研究会例会で、この小文と同じ題名の口頭発表を行いました。その席上で、またその後、高橋先生への感謝の言葉や、さまざまな思い出を参加者から聞かせていただくことができましたので、小文にその一部を取り込みました。高橋美也子様、ならびに皆様に御礼申し上げます。

【追悼2】

高橋覚二 先生
—縮小辞への思い—

角田 哲康

「西^{セイツー}2なら、覚ちゃんだよ。覚悟して一緒に頑張ろうね。」— 新入生の時間割作りを手伝ってくれる学生メンターが、「西2」とはスペイン語文法のクラス名、そして黒板の傍に立っている男性が「覚ちゃん」であることを教えてくれた。「覚悟して一緒に…」は謎だったが、これが高橋覚二先生と最初の出会いだった。私が1981年に入学した南山大学外国語学部イスパニヤ学科（当時）の新入生ガイダンスの時のことだ。

柔らかな呼び名から抱いた先生のイメージと実際の授業とのギャップに、ほどなく私は戸惑うこととなる。初回の授業で教室に入ると、まずそこに「一緒に」の答えがあった。あの先輩メンターたちが、後ろの席に再履修学生として座っていたのだ。授業で使うオリジナルテキストは、先生ご自身がタイプライターで打たれたもので、最初の発音説明も何もかもがスペイン語だった。高橋先生は、硬い表情で初回からどんどん授業を進めていく。「覚悟して」の意味もすぐに分かった。

分かっただけで覚悟が充分ではなかったせいで、私はこのスペイン語文法の授業についていけなくなり、単位が危ないと焦り始めた。この時ばかりは覚悟を決め、高橋先生に相談することにした。恐る恐る研究室のドアを開けると、沢山の研究書で溢れた奥から聞こえてきたのは、「どうしたの？角田くんよ〜♪」と歌うような優しい声だった。先生は、「落単」寸前の私のような学生にも勉強の仕方を丁寧に説明して下さった。思いもよらず先生は話好きで、高校の大先輩であり、ハンドボール部で活躍されていた話題になった頃には、緊張感はいっしかり和らいでいた。

学年末が近づくと、先生は西2クラスで「スペイン語暗唱会」を企画された。私も参加し、同時に進行も引き受けた。この「授業外努力」を先生は評価して下さったのか、私は何とか単位を得ることができた。暗唱会の打ち上げに、先生は参加者全員をご自宅に招き、庭先でパエリアを作り、振舞って下さった。参加者の輪には、あの再履修の先輩たちの笑顔もあった。

水面に滴が落ちた時、徐々に広がっていく水波紋。あの同心円のように、高橋先生が投げかける優しさは、学生の中にゆったり広がっていく。そう感じるようになった時、再履修の先輩たちが「覚ちゃん」と呼ぶ理由が分かったような気がした。

2年生になると、私は先生の研究室で参考文献の整理などを手伝わせていただくようになる。さらに「いつか役に立つから」と Rafael Seco や Samuel Gili Gaya の文法書の訳をまだまだ未熟な私に課され、マンツーマンでスペイン語文法をじっくりとご指導して下さった。先

生の研究室で学び過ごした時は、その後の私の人生を方向づける大切なものとなった。

この頃から高橋先生はパソコンでの文例、文献管理を始められ、授業メソッドにも導入された。新しい OS にも積極的に取り組み、IBM とマイクロソフトが開発した OS/2 を、当時はまだ珍しかった Windows とのデュアルブートで運用されていた。手伝いをかってでた私は、パソコンスキルも先生のもとで身につけることができた。

高橋先生がパソコンを通じて遺してくださったものが、もうひとつ手元にある。『現代スペイン語文典』— 先生が収集された文例を 41 章、388 頁に纏めたプライベート版文法書である。細かな文法事項を確認したい時、どこかの頁にその説明が必ず見つかる。今でもとても頼りになる存在だ。

コロナ禍、各大学ではオンラインでの授業を余儀なくされた。私がオンライン授業を楽しみながら進め、スペイン語教育に関わり続けられているのは、高橋先生が教えて下さった「パソコンリテラシーとスペイン語文法」のおかげに他ならない。

2045 年のシンギュラリティを講義で取り上げる今日では、パソコンによる編集、プライベート版の出版は少しも目新しいことではない。しかし高橋先生が始められたのは、今から 30 年ほど前のこと。時代に先駆ける、好奇心溢れる先生だった。実際、先生のご趣味は実に多彩だ。先生の教え子なら、真っ先に思い浮かぶのが当時の最新モデルの大型スクーター。名古屋から関西の学会会場までスクーターに跨って高速を駆け抜け、そのまま発表されたこともあった。奥様を後部座席に乗せてツーリングされたことを笑顔で語ってくださったこともしばしば。かと思えば、タキシードに身を包み、大会に参加されるほどの社交ダンスの名手でもあった。そして大の犬好き。シェパードを可愛がられ、頂戴する年賀状には、戊年ではなくても愛犬とご一緒の笑顔の写真があった。

私事で恐縮だが、忘れられない高橋先生との思い出がまだある。ひとつは先生の母校でもある神戸市外国語大学の大学院を受験する前、学生で新幹線料金が厳しかった私につき合い、名古屋駅から東京駅まで夜行バスに一緒に乗り、朝早くから明治神宮に合格祈願に出向いてくださったこと。幸せなことに、高校に続き神戸市外国語大学でも先生との繋がりができた。もうひとつは、残念ながらしばらく前に閉店してしまったが、スペイン・サラマンカの老舗書店に紹介状を書いてくださったこと。気難しそうな主人が目を通すと、「あの棚の端から端までのすべての本を購入したカクジの教え子か？」と急に笑顔になり、それ以来博士論文作成のための多くの文献を探してくれた。高橋先生は、私にいくつもの縁を結んでくださった。

学生たちは教員のことを、関心に応じて、様々な呼び方をする。私は「スぺ哲」と科目名（スペイン哲学）の省略形で呼ばれたこともある。しかし、卒業後もずっと「覚ちゃん」と縮小辞で呼ばれ続けるような先生は、いそうでなかなかいない。みんな高橋先生のごことが大好きなのです。

35.1.2 縮小辞の用法、3) 愛情を込める (高橋覚二『現代スペイン語文典』、357 頁)

高橋覚二先生、安らかな眠りにつかれますよう、心からお祈りいたします。
先生、本当にありがとうございました。

(すみた・てつやす 日本大学国際関係学部教授)

【エッセイ 1】

Efectos de los programas de estudio de español en línea de corta duración en universidades del mundo hispanohablante
Motoko HIRAI, Andrés PÉREZ, Paula LETELIER y Takeshi KAKIHARA

Bajo la pandemia se han multiplicado los programas de intercambio en línea a un ritmo acelerado. Las universidades japonesas solían ofertar programas de intercambio a corto plazo durante los períodos vacacionales. Sin embargo, cuando en la primavera del año 2020 Europa se convirtió en el epicentro de la pandemia del COVID-19 y se declaró el estado de alarma y de confinamiento, algunos de los participantes en dichos programas experimentaron una situación mucho más dura que la existente en Japón. Desde entonces estos programas presenciales quedaron suspendidos, siendo sustituidos por programas de intercambio en línea.

El contenido, la duración y la modalidad (sincrónica o asincrónica) de los programas en línea varía dependiendo del objetivo de cada programa y de las diferencias horarias que existen entre el país de la universidad anfitriona y el de la universidad que envía a sus estudiantes. Hay programas en los que están incluidas visitas virtuales a las familias de acogida, a museos y a fábricas, así como actividades de intercambio con estudiantes locales, mientras que otros se limitan a las clases de lengua española. Además, los gastos difieren de un programa a otro según el número de clases y actividades. Basándonos en esta particular situación, nos planteamos las siguientes dudas: ¿cuáles serán los efectos de estos nuevos programas? ¿Serán los mismos de los programas en los que enviábamos a nuestros estudiantes al extranjero antes de la pandemia?

Agradecemos al encargado del boletín de la junta directiva por brindarnos la oportunidad de presentar un estudio realizado sobre uno de estos programas, llevado a cabo en febrero-marzo del 2022 como parte del proyecto internacional compartido entre el *Cuerpo académico, CA-35 Tecnologías de la Información y las Comunicaciones para la Enseñanza y el Aprendizaje de la Universidad Autónoma del Carmen*, en México, y un grupo de profesores de lenguas española y japonesa de varias universidades japonesas del área de Kansai.

Nuestro programa consta de un curso de español híbrido, en el sentido de ser ejecutado sincrónica y asincrónicamente. De forma sincrónica se realizó un curso de español de dos horas diarias en horario de mañana de 8 a 10 entre martes y viernes a través de la plataforma Teams, combinado con un Aula Virtual de Aprendizaje (AVA) en una plataforma Moodle, donde de manera asincrónica cada estudiante accedía y realizaba estudios por su cuenta. A este se le sumó un intercambio cultural con estudiantes mexicanos con dos variantes, una presencial a través de Teams (los sábados de 8 a 10) y otra no presencial mediante Facebook, todo a lo largo de cuatro semanas. Convocados 20 universitarios colaboradores, terminaron participando 18, divididos en dos grupos según su nivel de español. Les realizaron un examen tipo DELE, una encuesta y una prueba BEVI (Beliefs, Events, and Values Inventory) a los participantes inmediatamente antes y después del programa con el fin de medir sus efectos desde una perspectiva lingüística, motivacional e intercultural.

El examen DELE se circunscribió a la prueba de comprensión auditiva y de expresión e interacción orales.

El porcentaje de estudiantes que completaron la prueba de comprensión auditiva fue del 77.78% antes del programa y del 83.33% después. En cuanto a la prueba oral, el porcentaje fue del 100%. Para la prueba de comprensión auditiva se solicitó a los estudiantes a través de un correo electrónico que respondiesen a las preguntas requeridas en el tiempo establecido. De un máximo de 25 puntos, los estudiantes obtuvieron unas notas sorprendentemente altas: una media de 21 puntos antes del programa y de 22.9 puntos después.

El examen oral también se realizó en línea. Al igual que el DELE A1 real, se puntuó a los estudiantes en base a dos descriptores, uso de la lengua y cumplimiento de la tarea, con una puntuación de 0 a 3. El resultado medio de todos los participantes antes del programa fue de 1.7 y de 2.02 después del mismo.

Debido a la pandemia del coronavirus evitamos cualquier encuentro personal con los estudiantes. Sin embargo, el no tener un control directo sobre la realización de la prueba pudo afectar a la credibilidad de los resultados de la comprensión auditiva. Lo creemos así porque la misma investigación la realizamos antes de la crisis del coronavirus sobre otro grupo similar de estudiantes que viajaron a España y México, y en aquel momento los resultados de la prueba, hechos de manera presencial, fueron de 13.35 antes de la estancia en el extranjero y de 19.1 después, sin que hubiera cambios destacables en la dificultad de las preguntas o el nivel de los participantes. En cuanto a la prueba de expresión e interacción orales, se aprecia una modesta mejora en los resultados, lo que confirma nuestra hipótesis de que los programas de español en línea tienen un impacto positivo sobre las habilidades lingüísticas de los participantes.

Al comenzar el diseño de este curso, pensamos que uno de sus elementos importantes debía ser el intercambio con los estudiantes de la Universidad Autónoma del Carmen. Desde hace un tiempo todas las corrientes de la enseñanza de ELE reconocen el desarrollo de las competencias interculturales como un medio para entender y comunicarse de una manera más efectiva.

El Marco Común Europeo de Referencia para las Lenguas MCRL (2001), señala la importancia de acercar y relacionar el mundo de origen con el mundo de la comunidad objeto de estudio. Este proceso provoca en el aprendiente una serie de factores que van a influir positivamente en su aprendizaje.

Basados en esta premisa, los estudiantes japoneses participaron en cuatro sesiones donde asistieron a clases con compañeros mexicanos a través de TEAMS. En ellas conversaron sobre temas como la familia, la casa, comidas y diferencias de género en sus países. Cada sesión se dividió en una introducción a cargo de la profesora para a continuación responder una serie de preguntas en grupos pequeños, terminando con un resumen final. Después de cada sesión todos podían subir a un grupo privado de Facebook más información sobre el tema o expresar su opinión. Según los comentarios de los estudiantes, esta actividad fue muy significativa y se ha mantenido en el tiempo, pues varios de ellos siguen en contacto.

Como hemos visto arriba, se puede concluir que este programa ha podido ofrecer clases equivalentes a las que ofrecen los programas realizados en los países hispanohablantes en cuanto a la mejora de la lengua oral de los estudiantes. Pero como límite del programa, se puede señalar que no ha

podido reemplazar por completo la experiencia local dirigida a mejorar las competencias interculturales. De todas maneras, tras el análisis del resultado de la prueba BEVI hemos descubierto aspectos positivos. Algunos participantes mejoraron los valores de sus competencias interculturales, mientras que los alumnos que tenían las capacidades interculturales más desarrolladas desde el principio pudieron sacarle más partido al curso.

Aparte de estos hallazgos, se han revelado algunos problemas específicos de los programas en línea. Muchos estudiantes han expresado la dificultad de concentrarse en las clases y la dificultad de asistir a estas debido a la diferencia de horarios.

Por último, queremos discutir las perspectivas de estos programas en el contexto japonés. En la actualidad ya se ha recuperado la normalidad y las clases de español se realizan de forma presencial en casi todas las universidades japonesas. Los programas de estudios en el extranjero también se reanudarán cuando se recupere el desplazamiento de personas. En estas circunstancias, ¿qué podemos y debemos hacer para aprovechar la experiencia de la pandemia?

Dado que estos programas tienen efectos positivos en mejorar el conocimiento lingüístico, sobre todo la habilidad oral, debemos pensar en la posibilidad de seguir ofreciéndolos como complemento del curso habitual. Para que estos programas continúen en un mundo normalizado, proponemos las siguientes sugerencias: 1) Para que los estudiantes sigan atendiendo a las clases, sería aconsejable enviarles recordatorios en ocasiones oportunas y crear medidas para mantenerlos motivados y concentrados durante la clase. 2) Para mejorar las competencias comunicativas interculturales, hay que fomentar los intercambios culturales con los estudiantes internacionales dentro de la universidad. Y, por último, 3) para que estos programas sean sostenibles, hay que formar a los profesores coordinadores.

(平井素子 立命館大学准教授)

(アンドレス・ペレス 同志社大学助教)

(パウラ・レテリエル 関西外国語大学教授)

(柿原武史 関西学院大学教授)

【エッセイ 2】

Reflexión sobre la enseñanza del español en los años de pandemia

Beatriz PRIETO MUÑOZ

Ahora que parece acercarse el fin de la pandemia y hemos vuelto a la “normalidad” de las clases presenciales, parece un buen momento para reflexionar cómo han sido estos dos años en la enseñanza del español y qué hemos aprendido de ello.

En el lado positivo, lo primero que podríamos destacar es la constatación de que somos capaces de adaptarnos a situaciones que antes nos parecían inimaginables. Es algo que nos debería dar confianza en nosotros mismos como docentes y como personas, puesto que no ha sido fácil, ni mucho menos. A pesar del tremendo esfuerzo que tuvimos que hacer para adaptar nuestras clases a formatos en línea, también es necesario reconocer que, afortunadamente, en Japón pudimos contar con una infraestructura que nos permitió poder seguir impartiendo clases en línea y, de esta forma, apenas hubo necesidad de cancelar clases, lo cual es de suma importancia según el demoledor informe de la

UNESCO, UNICEF y el Banco Mundial (2021) que detalla las terribles consecuencias sociales y educativas de cerrar las escuelas.

El segundo aspecto positivo que podemos destacar es el aprendizaje tecnológico, al que muchos nos resistíamos y que, probablemente, no habríamos tomado la iniciativa de emprender si no hubiese surgido la necesidad de hacerlo. A saber, hemos aprendido a usar entornos virtuales de aprendizaje, hemos aprendido a manejar herramientas de comunicación en línea, hemos debatido largamente sobre diferentes formas de diseño y evaluación de clases en este nuevo formato, etc.

El tercer aspecto positivo podría ser la flexibilidad que nos han ofrecido las clases en línea: pasamos de tener clases con estudiantes en un espacio limitado: el aula, a poder tener clases con estudiantes que estaban en cualquier lugar del mundo. Y, desde luego, no se pueden negar las ventajas de poder impartir o asistir a las clases desde el sofá de nuestras casas, sin necesidad de madrugar tanto y, sobre todo, sin necesidad de arriesgar nuestra salud en trenes atestados de gente. Es este un aspecto muy apreciado especialmente por los estudiantes que viven lejos de su universidad.

Sin embargo, y como no podía ser de otra forma, no todo ha sido positivo. Muchos docentes han sufrido un gran estrés al tener que adaptarse a nuevos formatos en tan corto espacio de tiempo mientras cuidaban a sus familias y a ellos mismos. Sin mencionar la inversión económica en equipamiento adecuado: ordenadores, conexiones rápidas, etc. Asimismo, ha generado ansiedad el uso de herramientas que nunca antes se habían utilizado y que en muchas ocasiones han causado problemas antes, durante y después de las clases. Y tampoco podemos olvidar que la flexibilidad espacial ha traído consigo una gran fatiga visual debido a las largas horas pasadas delante de un ordenador.

Pero la gran pregunta es: ahora que hemos vuelto a formatos presenciales, ¿han cambiado nuestras clases?

Mencionábamos anteriormente que habíamos aprendido mucho durante estos dos años, pero ¿qué pasará con todo este aprendizaje? Aunque parece que se están empezando a realizar estudios al respecto, todavía es pronto para establecer unas conclusiones claras. Sin embargo, la sensación general es que la mayoría de los docentes está usando alguna herramienta que empezó a incorporar a sus clases durante el periodo de pandemia: colgar el contenido de sus clases en entornos virtuales, usar herramientas de edición de vídeo, entre otras. De la misma forma, parece que, gracias a esta experiencia de pandemia, muchas universidades han añadido el formato en línea como una opción más para tomar algunas de sus clases, lo cual seguramente será de gran ayuda para sus estudiantes.

En cuanto al formato de preferencia, parece depender del contenido de las clases: quizá las clases magistrales se puedan seguir impartiendo sin problemas en ambos formatos, pero para los docentes que se apoyan en dinámicas de grupo, parece que el formato presencial resulta más adecuado debido a la necesidad de supervisión y a veces de intervención que se necesita en este tipo de clases.

Por otro lado, una de las cuestiones que más debates ha suscitado en algunos grupos de investigación, como GIDE¹ o TADESKA², es la forma de evaluación y el uso de las TIC, ya que en formatos virtuales los estudiantes tenían acceso tanto a libros de texto como a herramientas digitales, lo cual ponía en duda la fiabilidad de los exámenes. Para intentar solucionar este problema, o al menos minimizarlo, se pusieron en práctica varias opciones: limitar el tiempo, elaborar preguntas que

¹ Grupo de Investigación de la Didáctica del Español. <http://gide.curhost.com/index.html>

² Taller de Didáctica de Español de Kansai. <http://tadeska.sakura.ne.jp/index.htm>

exigieran pensamiento crítico, no únicamente copiar de alguna fuente, etc., pero muchos docentes estuvieron de acuerdo en que este nuevo método de enseñanza en línea exigía también un cambio en la forma de evaluar. Una de las propuestas que más se ha mencionado ha sido el cambio a una evaluación continua, así como dedicar tiempo en clase al aprendizaje y buen uso de herramientas digitales, como los traductores automáticos.

Sin embargo, más allá del formato de las clases y del sistema de evaluación, creo que también se deberían poner sobre la mesa debates que ya existían mucho antes de la pandemia, como el que propone Cassany (2022) sobre la integración del aprendizaje informal dentro del formal. No es ningún secreto que el contenido en español que los estudiantes consumen fuera de la clase muchas veces difiere en gran medida del contenido que se enseña en las aulas: música, series, chat con amigos hispanohablantes en aplicaciones de sus teléfonos móviles, etc. Siguiendo la propuesta de Cassany, algunos docentes hemos incluido en nuestras clases algún elemento de aprendizaje informal, muchas veces sugerido por los propios estudiantes, y hemos constatado sus excelentes resultados en términos de interés y motivación. De esta forma, puesto que estamos en un periodo de cambio estructural, quizás sería buena idea recoger también todos esos elementos de las TIC “prepandemia” y efectuar cambios a mayor escala, no simplemente basados en la dicotomía clases presenciales-clases en línea.

“Con una crisis llega una oportunidad” es una frase muy manida, pero creo que en este caso es completamente cierta, así que aprovechemos esta oportunidad que nos ha brindado la pandemia para replantearnos el uso de las TIC en nuestras clases con todas sus posibilidades.

REFERENCIAS BIBLIOGRÁFICAS

UNICEF (2021). Learning losses from COVID-19 could cost this generation of students close to \$17 trillion in lifetime earnings. Recuperado de <https://www.unicef.org/press-releases/learning-losses-covid-19-could-cost-generation-students-close-17-trillion-lifetime>

Cassany, D. (2022). Aprender ELE (y otras L2) en contextos informales. *Cuadernos CANELA*, 33, 5-23.

(ベアトリス・プリエト・ムニョス 大阪大学特任教員)

【エッセイ 3】

saber から conocer へ

長縄 祐弥

マドリードから AVE に乗り、コルドバの駅に着いたものの、大きなスーツケースを預けられる場所が見つからない。「駅の近くに預けられる場所がある」とものの本に書かれていたので、すぐに見つかるだろうと思っていたが、今日は日曜日でしかも夏休み真っただ中であり、ロッカールームを見つけても、十分な大きさのボックスがなく、店もことごとく閉まっている。開いている店を見つけてお願いをしても受け入れてくれるところはなかった。結局、時間が無駄だと判断し、わたしが荷物番になり、わたし以外の 5 人でメスキータを見に行ってもらうことにした。そういうわけで平均 70L の大きさのスーツケース 6 人分に囲まれながらこれを書いている。

2006年初めてスペインに渡航した際、ホテルを予約しておらず、やはりものの本に記載されていたオスタルに意気揚々と向かったら、満室だと断られてしまい、途方に暮れたことを思い出した。このとき、別の近所のオスタルに行けばいいということを学び、数をこなすうちにそのやりとりにも慣れ、断られても動じなくなり、部屋を見て、値段を聞いて泊まるかどうかを決めるくらいまでは度胸がついたものだ。

このように足で稼ぐようなことは今ではもう見られない光景なのだろう。全てがインターネットで、手に持っているスマホで簡単にできてしまう。ホテルだけではなく、コルドバのメスキータのような観光名所も予約しておかないと入れない可能性がある。個人的には自由気ままに旅行したいが、インターネットでの事前予約が主流になった昨今では、予約をせざるを得ない。行程が固定されることへの抵抗が少なからずあるため、未だにインターネットで予約をしようとするときには多少のためらいというか、本当に予約してもよいのかという葛藤が起きる。とはいえ、旅程が定まっていたほうが動きやすい人もいし、予約される側も管理しやすいはずなので、一概に悪いとはいえない。

コロナ禍のおかげで、インターネットで出来ることが良くも悪くも増え、留学ができない学生のためにオンライン留学というものまでできるほどである。それでは、現地に行く留学とオンライン留学が同じことが体験できるのかといえばそうではないだろう。知っているのとやるのでは全く違うということを経験できることのひとつが、海外旅行だったり、海外留学だったりするのだと思う。

そこで今回、今の日本の状況とアフターコロナを迎えているスペインの違いを体験するのは今しかないと判断して、多少の無理はあったものの、渡航を決断した。コロナ禍は終わったわけではないし、円安の状態でもあるし、ウクライナ問題も解決していないのに今わざわざ行く必要があるのかと言われたものだったが、よい経験が得られたと思っているし、一緒について来た5人もそう思っていると信じたい。

外国語を学ぶ意味を問われ続けて久しい。インターネットが普及し、機械翻訳を通せば、完璧ではないものの理解できるほどには翻訳してくれる。それゆえ、言語の運用以外に外国語を学ぶ意義を学生たちにしっかりと伝えなければならぬと日々考えているが、なかなか難しい。奇しくもスペイン語には、*saber* と *conocer* の違いがあり、この違いこそ言語を通じて教えるべきひとつのことではないだろうかとの滞在を通じて感じている。

メスキータの見学を無事に終えた5人が帰ってきた。これからセビージャに向かう。

(ながなわ・ゆうや 拓殖大学外国語学部助教)

【エッセイ 4】

アポロフォビアあるいは貧困者に対する嫌悪について

豊平 太郎

去年の夏、コロナ禍による緊急事態宣言の最中、メンタリストを名乗る芸人が「ホームレスの命に価値はない」と主張し、いわゆる「炎上する」という事態になった。感情的な言説が一瞬飛び交った後で即座に忘れ去られるのはいつも通りのことだが、その批判理由の大半が「命を軽視している」ということには驚かされた。命を軽視してはいけないことぐらい幼稚園児でも知っているのだが、この場合、「貧困者が貧困であること自体を理由に蔑視され、

差別されたこと」が問題だということに留意した人間はどのくらいいたのだろうか。この「炎上騒ぎ」は日本における「アポロフォビア (aporofobia)」がどれほど広く深く根付いているかを端的に表している。

アポロフォビアはスペインの哲学者アデラ・コルティーナ (Adela Cortina) による、ギリシャ語の「貧困 (áporos)」と「嫌悪 (fobia)」を組み合わせた造語である。その名の通り、貧困者に対する嫌悪と差別を意味している。1996年に一人の哲学者が作り出したアポロフォビアという言葉は2017年に Real Academia Española の辞書に収録され、正式なスペイン語として認められた。その他のヨーロッパ諸国でもレイシズム (人種差別)、ホモフォビア (同性愛嫌悪)、ミソジニー (女性蔑視) 等と並び、根絶されるべき差別の一つとして広く認知され始めている。

民主主義社会とは全ての人間に対して「尊厳」を認める、ということに疑う余地のない根源的な価値観とすることで初めて成立する社会である。オルテガ・イ・ガセットの言葉を借りるならば、自由民主主義とは異なる他者との「共存への意思」、それも弱い敵や弱い他者との「共存への意思」であり、かつて地球上でこだました人間の最も高貴な叫び声である。だがアポロフォビアは貧困者が貧困者であるというそれだけの理由で、その人間としての価値を否定する。深刻なのは貧困者を貧困ゆえに蔑視する人間がいるだけではなく、貧困者自身でさえ自らが貧困であるという理由で自身の人間としての価値を否定しがちになってしまうことである。その意味でアポロフォビアは、その他の差別と同様、差別する側の人間とされる側の人間、その両者において内面化されている。生活保護の申請を恥じる感情はこのような差別される側の人間に内面化されたアポロフォビアの表れである。また生活保護の申請を難癖付けて門前払いする、いわゆる「水際作戦」は社会的に構造化された、いかにも日本的な、恥知らずな貧困者差別の表れである。

果たしてアポロフォビアがコルティーナの主張するような生物学的、進化論的な基礎を持つかは大いに議論の余地がある。しかし仮に貧困者への嫌悪がほとんど生物学的な本能であったとしても、人間らしさというものは本能に従って生きるのではなく、それを自由な意志と理性によって統治し克服するところにこそ宿る。絶対的貧困が存在しない社会が望ましいのは言うまでもないが、仮にそれが成功したとしても現在の社会が比較競争を原理にしている限り、相対的な貧困者は構造的に、つまり必然的に、生み出される。しかし貧困であることは、それ自体としては人間の「尊厳」を何一つ損なわないし、損なうべきではない。

私たちの日常的な経験は、人間に対してすら経済的な「有用性」や「等価交換」の原理を当てはめずにはものを考える事ができない人々がどれほど多いかを雄弁に教えてくれる。彼らはその上、自分の考えが十全であり、賢明であり、分別があり、合理的であり、ついでに言えば道徳的にも正しい、と思っているのかもしれない。オルテガはこのような存在を「大衆-人 *hombre-masa*」と呼んだ。「お前の存在は、私に対して、社会に対して、集団に対して、いかなる利益を与えることができるのか?」「お前との交友関係に費やした金や時間に見合う利益を、お前は私にもたらすことができるのか?」この程度の価値基準でしか人間を測ることができない社会においては、「持たざる者」は必然的に最も利用価値の低い人間として扱われることになる。このような人間は社会の「お荷物」、「いない方がいい存在」、「価値のない役立たず」とみなされる。アポロフォビアは別に現代社会に特有の差別ではない。だが経済性と有用性が「大衆-人」の宗教と化した高度資本主義社会において、アポロフォビアは他のいかなる社会よりも構造的に強化されるのである。そこでは「人間の尊厳」というも

のは中身の無い空言に過ぎなくなる。

コルティーナは『アポロフォビア』の冒頭において、毎月の外国人観光客数の増加がマスコミで喜々として報道されるのに対して、別の「外国人」たち、命を賭してヨーロッパにたどり着こうとする「裕福な観光客」ではないアフリカからの移民たちが、あたかも押し寄せる災厄か何かのようにみなされるスペイン社会の偽善性を批判している。そこにあるのは外国人差別 (xenofobia) などではない。「お金を落としていく裕福な観光客」である限りにおいて、外国人は差別されるどころか、もろ手を挙げて熱狂的に歓迎されるのである。移民が差別されるのはたった一つの理由、彼らが「お金を持っていない」という事に付随する理由だけなのであり、従って、そこにあるのは貧者に人としての尊厳はないとするアポロフォビアである。ところで、コルティーナが批判しているスペイン社会の偽善性にどこか見覚えがあるのは私だけだろうか。

メルロ＝ポンティが強調していたように、人間はある現象に名前が与えられるまでは、それを同一の現象として認識することができない。一本の枯れ木は「枯れ木」という言葉が作り出されるまで、枯れ木として認識されることはない。アポロフォビアも「アポロフォビア」という言葉が作り出されるまではアポロフォビアとして認識されることはない。『アポロフォビア』が日本語に訳されることが望まれる理由である。

(とよひら・たろう 京都外国語大学・立命館大学非常勤講師)

【書評 1】

仁平ふくみ『もうひとつの風景 フアン・ルルフォの創作と技法』

(春風社、2022年)

安保 寛尚

ラテンアメリカ文学研究者ではなくとも、メキシコの小説家フアン・ルルフォの名前と中編小説『ペドロ・パラモ』のタイトルは聞いたことがあるに違いない。語り手を含め、登場人物が実はみな死者という設定で、パズルのように断片化された時系列の異なる場面や出来事のピースが、その死者たちの語りを通して少しずつはめ込まれ、コマラというすでに崩壊した共同体を浮かび上がらせる。本書は、ルルフォの作品や活動の全体を視野に入れて、このような独創的な作品を生んだ創作と技法の解明に取り組んだ研究書である。

本研究書のオリジナリティの一つは、そのアプローチにおいて、ルルフォの年代記^{クロナイカ}への関心と初期の紀行文を射程に入れたことだ。実際にルルフォは、スペイン人年代記^{クロナイカ}作者たちを「メキシコ最高の作家」と評して愛読していた。彼らの眼には驚異的に映ったメキシコの現実が、簡潔で即興的な文体で記された記録は、ルルフォにとって文学作品に等しかったのである。そして年代記^{クロナイカ}の影響は、『地図 自動車旅行と観光の雑誌』に発表された紀行文に現れていると著者は指摘する。訪問した場所において「よそ者」のルルフォは、風景や歴史から受けたインスピレーションをもとに彼なりの見解や解釈を挟み、謎めいた村民の語りを挿入して、紀行文を現在と過去が交錯する幻想的テキストに仕立てているのである。『ペドロ・パラモ』の誕生は、ルルフォが彼なりの方法で年代記^{クロナイカ}作者になろうとした結果であるという論は、驚きであるが非常に説得力を持っている。「もうひとつの風景」という本書のタイトルは、ルルフォ作品に立ち現れる農村の風景が、現実の風景を出発点としつつ、ルルフォ

独自の年代記スタイルによって生み出された「新たな風景」であることを示唆しているのだ。そして著者は、短編集『燃える平原』および『ペドロ・パラモ』における、実在する場所や実際に起こった出来事のフィクション化と語りの技法の分析を通して、「もうひとつの風景」が構築される仕組みの解明に取り組む。

評者がかつとも関心を持ったのは、その仕組みの要としての口承文化である。ルルフォの生地サユエラには、死者が戻ってきて生者に取引を持ちかける「サユエラの靈魂」という言い伝えがあるそうだ。そのような口承伝統が残る土地で育ったルルフォには、人々の声に耳を傾ける特別な感性が備わっていて、口伝えの文化が創作の源になったと著者は考える。実際のところ、『ペドロ・パラモ』はおよそ村人の語り、会話、噂話で構成されている。したがって読者は、それらの話し言葉を「聞きながら」、コマラの風景とそこでこの出来事を想像し、再構築しなければならない。ところが、語られる内容は話者の見方によって変化するため、読者が結び合わせた像は複数性と曖昧さを孕んでいる。それはまさに口承文化における物語の継承のあり方だ。さらに、このような口承伝統の聴覚的特徴に注目した分析によって、『ペドロ・パラモ』における「噛み合わない会話」の謎が見事に解明される。すなわち、この作品における死者の語りや物音は、コマラのある場所におけるいくつもの過去の時点を貫いて接続し、異なる時間の層に浮遊する魂の声を同じ平面につないでいるのだ。つまり、噛み合っていないように聞こえる会話は、声や音をきっかけに、いくつもの時空間を超えて成立したやり取りなのである。ルルフォは、言わば霊媒師のように、ある風景に積み重なった過去の出来事と人々の声を垂直に掬い上げた。そしてそれらを時系列に整理することもその中から真実を決定することもせず、語り部のように彼なりの年代記として読者に語り継いだと言えるかもしれない。

あえて評者が感じた本書の難点を言うなら、通読した時に全体を貫く筋が見えにくくなる箇所があることである。とはいえ、ルルフォの全体像を明らかにすることが本書の目的の一つであるから、それはやむを得ない。いくつかの章の論考については、独立した論文として参照する読み方もできるだろう。

最後に評者の関心に引きつけて書くと、本書はメキシコ文学に限定されない文学研究の新たな地平を切り拓く可能性があると思われる。著者はあとがきで、熊本の水俣病患者の声を通して「もうひとつの風景」を描き出した石牟礼道子の作品群が、ルルフォの作品に近いと考えていると述べる。共通する土台には、権力を持たない人々の語りと土着文化があるだろう。ヴァナキュラーな言語と文化を基盤とする文学を「ヴァナキュラー文学」と呼ぶなら、本書はその横断的・学際的な文学研究の一つの突破口になりうるように思う。

(あんぼ・ひろなお 立命館大学教授)

【書評 2】

ロドリゴ・フレサン『ケンジントン公園』

(内田兆史訳、白水社、2022年)

花方 寿行

21世紀に入る頃から、日本も含め世界的に自国ではない国や地域を舞台にした小説が書かれることが多くなってきたように思う。正反対の、極めて私的な家族史をモチーフとしたオートフィクションの隆盛と対を成しているようだが、そこには現代の自国を舞台にして完全なフィクションを成立させることの困難と共に、自分が直面する現代社会の問題が遠く離れた地域でも共有されているという、グローバル化したポストモダン社会＝世界の現状が反映しているようにも思われる。

本書は日本では初紹介となるアルゼンチン出身の作家フレサンの長編小説であり、舞台は一貫してイギリス。現代のベストセラー児童文学作家フックがとある一晩に行う独白の中で、19世紀末から20世紀初頭を生きた作家ジェイムズ・バリーの生涯と代表作『ピーターパン』のモデルになった子供たちとの屈折した関係が、1960年代のイギリス・ポップカルチャー界で活動し若くして死んだ自分の両親との関係に重ね合わせられながら語られ、やがてポップカルチャーの華やかさの陰で「大人になることを拒否する」若者文化の呪縛と、それによって成長する機会を失い「迷子たち（ロスト・ボーイズ）」として時間・歴史の中を彷徨いながら精神を病んでゆく次世代の苦悩が明らかになってゆく。

アルゼンチンといえばボルヘスはもちろん、ギジェルモ・マルティネス『オックスフォード連続殺人』のように、以前からイギリスへの共感を示す作家を輩出していた。だが本書の場合、イギリスが確かに出発点であり、流行の中心であったことから舞台に選ばれているとはいえ、テーマは（アルゼンチンから見た）「イギリス的」なわけではない。成長拒否と若者文化への固着、そして子供と「一緒に遊ぶ」ことを優先させているように見えて、実際には子供の「子供らしさ」を侵犯し搾取することにより子供を疎外し隷属させてゆく親の問題は、全世界的なものである。1980年代に世界的にベストセラーとなった『ピーターパン・シンドローム』が、バリーやフックの親世代が抱えた問題を指摘しているとするれば、90年代以降世界の多くの国で、成長のためのモデルを失い、怪物的な「子」として自分を認識しながら苦悩するその子供世代を描く作品が生み出されてきている。たまたま日本紹介（公開）が近い時期となった、近年はアメリカで活動するメキシコ出身のギジェルモ・デル・トロ監督の新作『ナイトメア・アリー』もまたそうした作品の1つだ。具体的な時代と場所がイメージされながら、それは作者自身の生活圏と必ずしも物理的に近い世界ではなく、それでいて精神的な近さがあるからこそ身近なものとしてリアルに描かれてゆく。フレサンの描く「イギリス」は、執筆当時イギリスに行ったことがなかったというフレサン自身と同様、必ずしもイギリスにもアルゼンチンにも近しくない現代日本人にも「身近な」世界なのだ。訳文の巧みさもあり、本書が優れた日本の作家によって書かれたものだったとしても、大きな驚きはないかもしれない。このようなテーマのグローバルな身近さやそれを意識した作りは、バリーが生きた時代がバルガス＝リョサ『ケルト人の夢』に描かれる時代と重なり、共通して登場する歴史的人物がいることを想起すると、際立って感じられるだろう。

本書に物足りなさがあるとするれば、バリーの生涯、1960年代のポップカルチャーがディテール豊かに描かれているのに対して、語り手フック（および作者フレサン）が苦悩しながら

生きてきたはずの 70-90 年代が飛ばされているところだろう。記者があとがきで触れているように、フレサンはロベルト・ボラーニョの友人だったのだが、実はボラーニョの『野性の探偵たち』こそが、70-90 年代にかけて 60 年代の高揚が失われてゆく中で徐々に「迷子」になってゆく若者たちの自滅への道を描いている作品なのだ。本書と同じく『野性の探偵たち』でも「迷った・失われた *lost, perdido*」という言葉がキーワードとして用いられていることから、この 2 作の共通性は確認できる。フレサンとしては『野性の探偵たち』が既に存在しているのに、同じ時代を似たテーマで描くことに躊躇いがあったのかもしれないが、この結末に至るにはやはりフレサンなりの 70-90 年代総括があつてほしかつた。だがこの難点があつても、一個の作品としての重要性には変わりがない。フレサンの今後の活躍と、未訳作の翻訳紹介が進むことを期待したい。

(はながた・かずゆき 静岡大学教授)

【書評 3】

Elia Saneleuterio y Mónica Fuentes Del Río (eds.), *Femenino singular. Revisiones del canon literario iberoamericano contemporáneo*
(Ediciones Universidad Salamanca, 2021)

斎藤 文子

フェミニズム文学批評は 1970 年代以降、文学研究において重要な位置を占めるようになり、さまざまな潮流を取り込みながら、現在も質の良い研究を発信しつづけている。

本書は、バレンシア大学で教鞭をとっている Elia Saneleuterio とマルティン・ガイテの研究者である Mónica Fuentes Del Río が編纂したフェミニズム批評の論集で、12 の論考が収録されている。副題に「イベロアメリカ現代文学のカノンの再検討」とあるように、扱われているのは 20 世紀及び 21 世紀のスペイン語圏世界でいわゆるカノンになっている女性詩人・作家たち——アルフォンシーナ・ストルニ、ネリー・カンポベージョ、ロサリオ・カステジャーノス、エレナ・ポニアトウスカ、ベアトリス・ギド、マリア・サンブラーノ、マルティン・ガイテ——だが、このほかに、カノンのなかに新しく入れるにふさわしいと編者たちが考えるスペイン出身のアナ・メリーノ、メキシコ在住のキューバ詩人オデッテ・アロンソ、グアテマラ出身のラッパーであるレベッカ・レーンなどが取り上げられている。ほとんどが女性の書き手による作品を分析したものだが、スペインの戯曲家アントニオ・ガラヤ、チリの作家パブロ・シモネッティなど、男性作家を扱った論文もある。

12 の論考は 3 つのセクションに分かれている。第 1 部は、"El yo como cuerpo y espacio: transgresión y movimiento"で、その冒頭に収録されているのは、ストルニの詩における都市(ブエノス・アイレス)の描かれ方と詩のなかの「私」が、創作時期によって変化していることを追った Mutsuko Komai の論文である。語り手「私」が初期作品では女性だったのが、後期になると性別が明示されなくなり、同時に「私」と都市との関係も変化しているという指摘が興味深い。グラフィック・ノベルに関する博士論文を書き、小説 *El mapa de los afectos* が 2020 年ナダル賞を受賞するなどマルチな才能を発揮するアナ・メリーノを取り上げた Alfonso Bartolomé は、詩作品に注目し、「ここは私の場所ではない」(*Este no es mi territorio*)というフレーズをキーワードに、詩のなかでうたわれる女性移住者の疎外感をあぶりだした。そのほか、

メキシコ革命を女性の視点から描いた作家でダンサーでもあったカンポページョを扱ったもの、レズビアン詩人のオデッテ・アロンソの詩をクィア理論を使って考察したものがこの第1部に収められている。

第2部"**Representaciones de la maternidad y la infancia**"では、アントニオ・ガラの戯曲に登場する女性を4つのタイプ(女王、女神、母、娼婦)に分けて分析したもの、パブロ・シモネッティの小説における母親と4人の子供たちの関係を、イタリア移民の家父長制の伝統という観点で検討したもの、1940年から1950年にかけてのペロン第一次政権下における若い女性の成長を描いたビルドゥングスロマンであるベアトリス・ギドの *La caída* を、父親不在の貧困家庭の子供たちとの交流を中心に分析したものほかに、4人の女性作家の作品のなかで描写される、娘から見た母親の「髪」に注目した Bergmann と Saneleuterio による面白い論考が入っている。母親の髪の毛は母娘の関係を象徴し、魅惑的・官能的でもあれば近寄りたく怖いものでもあり、娘は母から自立するために絡みつくその髪から自由にならなければならない、と読み解いている。

最後の第3部"**De lo singular a lo plural: el feminismo y el compromiso en la literatura**"に集められているのは、哲学者マリア・サンブラーノの思想における「私」のなかの複数の他者性についての考察、マルティン・ガイテの作品における女性と文学・読むこと・書くことの関係の分析、グアテマラ出身の詩人、ミュージシャン、社会学者で社会活動家でもあるレベッカ・レーンにとってヒップホップを歌うことは何であるかを考察したもの、そして本書の最後を締めくくるのが、作家、ジャーナリストであるロサ・モンテロが1970年代終わりから2010年代にかけて書いた3つの小説を扱った論文である。執筆者の Lucia Russo は、モンテロの作品に描かれる女性が、フランコ時代から現代にいたるスペイン社会での女たちの状況の変化を写し出していることを明らかにするが、彼女の考察はここで終わらず、一步踏み込んで、ジェンダー不平等、社会格差などの社会問題を若者に学んでもらうための手段として、ロサ・モンテロのような女性作家の作品を高等教育の教材に取り上げることを提言している。

本書に集められた論考は、例外はあるもののその大部分が、まず序論で、取り上げる作家、社会的・歴史的背景、もしくは分析に用いる概念の説明を行い、本論での分析のあと、全体をまとめた上で結論を述べ、最後にやや詳しい参考文献リストを付けるという、論文の書き方のお手本のような体裁で統一されている。ほとんどが読みやすく書かれており、編者が丁寧な目を通して作り込んだ論文集であることが伝わってくる。

メインタイトルの *Femenino singular* は、文法用語では「女性単数」を表すが、意味するところがはっきりしなかったのが、執筆者のひとり駒井睦子さんを通して編者に質問していただいたところ、"**quisimos expresar que cada experiencia femenina es singular aun pudiendo representar a varias mujeres**"という回答を得た。女性ひとりひとりの経験は唯一無二のもの、というようなことであろうか。

(さいとう・あやこ 清泉女子大学教授)

【書評 4】

Hidehito Higashitani, *La flor del ciruelo y la rosa azul*

(Prensas de la Universidad de Zaragoza, 2021)

穂原三佳、福嶋教隆、成田瑞穂、野村竜仁

本書は、東谷穎人 神戸市外国語大学元学長がスペイン語圏の読者を対象に著したエッセイ集である。万葉歌人が愛した「梅の花」の話題に始まり、lo irrealizable を象徴していた「青い薔薇」の栽培が日本で実現したというニュースに至るまで、我が国の古今のさまざまな様相が綴られている。表題の2つの花の名前はこれを表している。

本書を構成する 101 編¹ のエッセイは、2008～2013 年にわたってスペインの *El Imparcial* 紙に連載された著者の寄稿をテーマ別に配列したものである。同紙は、José Ortega y Gasset の祖父 Eduardo Gasset y Artime によって 1867 年に創設された。その後長らく途絶えていたが 2008 年にデジタル版となって復活し、同年から著者の連載が開始した。

本書は、10.5×19 cm の小型版で 336 ページから成る。編者 José Pazo Espinosa と David Almazán Tomás による序文に続き、次の 4 つの章に分かれてエッセイが展開する。① 日本の芸術、文学、② 現代日本の社会、政治、経済、③ 日本に関わったスペイン人、④ 国際社会と日本。各編 2～3 ページの、読みやすい分量である。以下では、①に属するエッセイを 2 つ、③に属するものを 2 つ、例として紹介し、評を加える。

1) *Kusamakura*, libro de cabecera de Glenn Gould (pp. 50-52) : カナダのピアノ界の鬼オグレン・グールド (1932-1982) が夏目漱石の『草枕』の英訳版を愛読していたことを扱っている。国やジャンルを超えた 2 人の芸術家の意外な接点が興味深い。文中では「草枕」という日本語の語義、この作品の内容がスペイン語圏の読者むけに平明に解説されている。評者の思うに、『草枕』には M. Watkins 他・訳、E. Masiá 他・訳、J. Zamora Lablanca 訳と、複数のスペイン語訳があるので、今後、スペイン語圏の芸術家にも影響を与えるかもしれない。

2) *Ínfimas condiciones laborales en el mundo del anime* (pp. 89-91) : 今ではアニメは日本文化の重要な一角を占めるに至ったが、実はそれを支えるクリエイターは劣悪な労働条件下にあることを憂う一編である。このエッセイが発表された 2009 年当時、20 代のクリエイターは平均年収が 100 万円少々であるにもかかわらず「絵を描くことが好きなので、この仕事を続けたい」と答える者が多かったという。著者は、個人の犠牲の上に成り立つ産業はいずれ行き詰ると考え、何らかの公的対策が必要だと説く。ステレオタイプな「アニメ王国日本ばんざい」に飽き足らぬ、血の通った人間へのまなざしから生まれた日本紹介文である。

3) *Cuentos del Japón viejo: una joya bibliográfica rescatada del olvido* (pp. 200-203) : スペイン語訳『日本昔話』(弘文堂、1914 年) の復刻版が 2009 年にマドリードの Langre 社から出版されたことを伝え、以下のような紹介をおこなっている。「これは同一の挿絵に諸言語の訳をあてた小冊子シリーズで、浮世絵の技を引き継ぎ、細密な挿絵を木版で特殊な和紙に刷った『ち

¹ 元の連載は 102 回にわたるが、2010 年 11 月 2 日の記事は同年 8 月 2 日の記事の再録 (本書の p. 268～271 に該当) なので、エッセイ数は 101 編となる。

りめん本』と呼ばれるものである。1885年の英訳をもとに、Juan Valera が *El pescadorcito Urashima* などの短編を著している。復刻版では『桃太郎』『舌切り雀』など10編を1巻にまとめている。訳者は東京外国語大学の前身、東京外国語学校の外国人教師だった Gonzalo Jiménez de la Espada である。同氏は新渡戸稲造の『武士道』も訳している (*Bushido: el alma del Japón*, Madrid: Daniel Jorro, 1909)。²

評者の判断では、Jiménez 訳は Valera の短編に勝るとも劣らぬ流麗な名文だと考える。Jiménez 訳の入手が容易になった今、ぜひ読み比べをお奨めする²。

4) Miguel Pizarro, docente ejemplar y hombre de pro (pp. 206-209): 大阪大学外国語学部の前身、大阪外国語学校で教鞭をとっていた Miguel Pizarro Zambrano y Zambrano (1897-1956) の業績を紹介している。Pizarro が日本に赴任することになったとき、友人の Federico García Lorca は ¡Miguel Pizarro! ¡Flecha sin blanco! という句で始まる詩を贈って別れを惜しんだ。来日後は歌舞伎や能に親しみ、その影響を受けた戯曲や詩の創作もおこなったという³。

Pizarro が日西双方の文化の架け橋として果たした役割は、先に紹介した Jiménez de la Espada のそれと同様、きわめて重要だが、時の流れに埋もれつつあった。そのような先人の功績をスペイン語圏の人々に知らしめた本エッセイ、そして本書の意義は大きい。

本書は、これ以外にも、サッカーや大相撲から広島、長崎の原爆や東日本大震災に至るさまざまな話題を扱っている。その基底には、Gracián や Clarín などのスペインの思想、文芸の真髄を日本に紹介する一方で、世阿弥や芥川をはじめとする日本文学をスペイン語圏に伝える作業にも携わってきた著者の深い造詣と鋭い観察眼が横たわっている⁴。文中、Juan Ramón Jiménez や Pablo Neruda などの人口に膾炙した句が巧みに引用され、日本とスペイン語圏という異文化の垣根を取り払うのに効果をあげている。

洒脱で、力みの感じられない、『徒然草』にも似た、著者一流の語り口で綴られる文章は、私たちを楽しませると同時に、蒙を啓き、知的高揚感を与えてくれる。本書は、スペイン語圏の人々に日本についての的確な解説を提供するのみならず、日本でスペイン語を学ぶ私たちに、日本の事情をどう説明すればスペイン語圏の人に伝わるかについての指針を示していると言えよう。

(あきはら・みか 神戸市外国語大学准教授)

(ふくしま・のりたか 同名誉教授)

(なりた・みずほ 同教授)

(のむら・りゅうじん 同教授)

² たとえば、「浦島太郎」で乙姫が浦島に玉手箱を渡すときの言葉は次のとおりである。Valera 作: «Toma, con todo, esta caja, y cuida mucho de no abrirla. Si la abres, no lograrás nunca volver a verme.» / Jiménez 訳: «Sólo te pido que lleves contigo esta caja y no la abras jamás, pues si así lo hicieras, no podrás volver.»

³ Pizarro については、本書にも言及がある次の書籍によって詳しく知ることができる。ミゲル・ピサロ著、中岡省治・吉田秀太郎・堀内研二 訳『詩と演劇』(ミゲル・ピサロ作品集翻訳・出版会、2007)。

⁴ 著者には、バルタサル・グラシアン『処世の智慧: 賢く生きるための300の箴言』(白水社、2011)、同『人生の旅人たち: エル・クリティコン』(白水社、2016)、クラリン『ラ・レヘンタ』(白水社、1988)、Zeami, *Fūshikaden: tratado sobre la práctica del teatro Nō y cuatro dramas Nō* (Madrid: Trotta, 1999)、Akutagawa Ryūnosuke, *El tabaco y el diablo y otros relatos cristianos* (Gijón: Satori, 2021) などの訳書がある(最後の2点は Javier Rubiera との共訳)。

【書評 5】

シルビナ・オカンポ『蛇口 オカンポ短篇選』
(松本健二訳、東宣出版、2021年)

駒井 睦子

ラテンアメリカについて書かれた文章の中で、必ず「寡頭支配層」、「貴族・上流（特権階級）」といった語で表現される一族がいる。ラテンアメリカ文学研究者にはおなじみの、ビクトリア・オカンポ一家のことだ。超名門という言葉がふさわしい家柄に生まれた6人姉妹の長女が文芸誌『スル』を主催したビクトリアで、この書評で取り上げるシルビナ(1903-1993)は末の妹である。

シルビナ・オカンポの名は数々のラテンアメリカ文学史の中にみることができるが、その扱いはささやかだ。本書の「訳者あとがき」において松本健二氏は、この作家について「いわゆる〈ブームの世代〉の男性作家に比して翻訳もあまり進まず、アルゼンチンでは『オカンポ邸の娘たちのひとり』とか『あの女傑ビクトリアの妹』とかいった形で、国外の目の肥えた文学マニアのあいだでも『ボルヘスの盟友』とか『ビオイ・カサーレスの妻』という形でかろうじてその名を知られるにとどまり、世界的に見れば南米のマイナー作家」と記しているが、私自身もそのように認識していた。しかし、アルゼンチンが注目を集めた20世紀の文学についての記述や、ラテンアメリカ（あるいはアルゼンチン）の短篇アンソロジーの類を手にするとき、シルビナ・オカンポの名をしばしば目にもすることも確かだ。そういった意味では、これまで特に日本ではあまり注目されてこなかったが、もっと研究・翻訳が進んでもよい作家のひとりである。この度、松本氏の手により選ばれた短篇36篇が翻訳・出版されたことを大変喜ばしく、またありがたいと感じている。

幻想小説として分類されるシルビナ・オカンポの短篇では、まさに理屈では説明できない物語が展開する。本書では主に円熟期に刊行された作品が選出されているが、少女時代の記憶が感じ取られる初期作品も魅力的だ。幾つか例を挙げると、一人旅をする少女が乗った客船が、一匹の魚が引き起こした事故によって沈没しようとする「失われたパスポート」、サーカスで猿とともに芸をする少女と恋人との間に生じる奇妙な三角関係(?)の末路を描いた「空中ブランコの情景」、裕福な家の娘が貧しい家の娘と入れ替わる「オリーボスの二軒の家」はいずれも最初の作品集から選ばれたものだが、少女時代の空想がやがて短篇へと結実している様子がうかがわれる。

円熟期の短編集『フリアイ』から選ばれた中で、私が気に入ったのは「ミモーソ」だ(後述するもう一冊の翻訳者寺尾氏によれば、ボルヘスが好まなかった作品だそう)。これは愛犬が死んだ後も傍に置きたいと願う夫婦が、犬を剥製にする物語である。ただし、犬が完全に息を引き取る前に職人の下に運び込んだり、他人の中傷に腹を立てた夫がせつかくの剥製を台無しにしたりするうえ、挙句の果てに妻は大切な思い出であるはずの犬を復讐に利用してしまう。彼らの犬への愛情はあくまでも身勝手そのものだ。謎が多いシルビナ・オカンポの物語の中で、「ミモーソ」は比較的ストーリーが明快で、ロアルド・ダールの短篇を彷彿とさせるブラック・ユーモアがあり、話運びのテンポもよい。しかし登場人物の心の動きはよくわからない。

「フリアイ」に至っては、フィリピン人の子守を誘惑する男性の語り手と、子守の女性との間のちぐはぐなやり取り、やがて起こる殺人と逮捕、投獄という理不尽な物語があれよあ

れよという間に展開してしまう。子守のビニフレードが復讐の女神（フリアイ）なのだろうが、語り手の心情は不明瞭で、行動を見る限りまともな精神の持ち主とは考えにくい。松本氏が「訳者あとがき」において「信用できない語り手」に言及している通り、物語の登場人物たちの多くがある種「イカれた」精神の持ち主であるように思われ、彼らのみている世界が正常のものなのかどうか、読み進めていくうちに疑わしくなる。

語り手に対する信頼の欠如だけでなく、人物が悪意を胸に秘めていることも彼女の作品の特徴の一つであるように思われた。前述した通り、作中人物の感情表現はおおむね乏しいが、ふとした瞬間に彼らの邪悪さが行為となって噴出する（例えば呪い好きの「雄牛の娘」、双子が一人の女性を共有する「僕たち」、猫殺しと殺人を描く「アメリア・シクータ」など）。まるで、ちょっと鍋のふたを開けたら湯気がふわっとあたりを覆うかのように、些細なことをきっかけに登場人物の悪意が形を成して、物語を動かしてしまうのである。ところが、なぜそのような行為に至ったのかが、ほとんどの場合よくわからないまま終わってしまう。

フリオ・コルタサルは日常から非日常の世界へと——まるで、トンネルを抜けて行くように——ずりりと渡ってしまう人々を描いたが、シルビナ・オカンポの場合は、害意によって世界が塗り替わっていく模様をさらりと乾いた口調で述べる。そこは、行き過ぎた自己愛が他者への愛すら変質させ、理想的な関係を築くことができない人々が支配する物語世界だ（「償い」）。このような関係性もまた人間の本質のひとつなのかもしれないと、奇妙なりアリティを感じつつあつという間に本書を読み終えてしまった。

紙幅の都合上紹介のみになってしまうが、ほぼ時を同じくして同じ作者の短編集『復讐の女』（松本氏は『フリアイ』と訳）と『招かれた女たち』の全 89 編を翻訳・収録した『復讐の女／招かれた女たち』（寺尾隆吉訳、幻戯書房、2021 年）も出版された。同時にオカンポの短篇選集、短編集が出版されることの偶然に驚きつつ、こちらも手に取らずにはいられなかった。寺尾氏による翻訳書には巻末に詳細な年譜のみならず、氏の「訳者解題」も掲載され、シルビナをめぐる人間関係も知ることができる。

選集を先に手に取り、珠玉の作品をまず味わうことから始めてもよし、作者の全体像に迫ることができる 89 篇にチャレンジするもよし、いずれにせよ、謎の多かったアルゼンチンの女性作家にアプローチできる機会がぐっと増えたのは大変嬉しいことである。

（こまい・むつこ 清泉女子大学文学部准教授）

【書評 6】

田辺加恵・大原志麻・井上幸孝
『聖ヤコブ崇敬とサンティアゴ巡礼
—中世スペインから植民地期メキシコへの歴史的つながりを求めて—』
(春風社、2022年)

福地 恭子

本書は、中世スペインから植民地期メキシコまでの聖ヤコブ崇敬の歴史的変容に関する研究書である。本書の目的は以下の2点である。「イベリア半島における聖ヤコブ崇敬の始まりと大西洋を越えた先の世界での展開について、歴史的経緯の一端を明らかにすること」(p. 7)、「中世のスペインからスペイン統治期のメキシコまでの時間と空間に焦点を当て、聖ヤコブという具体的対象を軸として、一つの流れの中で提示するよう試みる」(p. 7) ことである。というのも、「中世スペインと植民地時代メキシコは、いずれも歴史学の研究対象とはいえ、同じ枠組みの中で議論されることがほとんどない」(p. 7)からだ。そのため、本書の論点・視点は独創的であり、中世スペイン史の田辺加恵氏、中近世スペイン史の大原志麻氏、メキシコ史・メソアメリカ史の井上幸孝氏による共同研究であったからこそ成し遂げられた成果であろう。

近年のサンティアゴ巡礼の盛り上がりを見ると、聖ヤコブは普遍的な崇敬の対象としてこれまで不変であった印象を受けるが、実際には各時代で盛衰を繰り返してきた。その崇敬の過程を具体的に示すために、本書は6章構成でありながらも、第1・2章《古代から中世盛期のスペイン》、第3・4章《中世盛期から近世にかけてのスペインとコンキスタドーレス》、第5・6章《植民地時代メキシコ》と時代を三つに区分している。これにより各時代の聖ヤコブ崇敬の変化がより浮き彫りになる。本書評では、この区分に沿って聖ヤコブ崇敬の変容を見ていく。

第一区分は田辺氏の第1章「スペインにおける聖ヤコブ崇敬およびサンティアゴ巡礼の始まり」、第2章「サンティアゴ巡礼の最盛期—聖ヤコブの騎士化とその影響—」である。第1章ではヒスパニアにおける聖ヤコブ崇敬の淵源を遡り、聖ヤコブの伝道とガリシアへの移葬の伝承そして「発見」は、ヒスパニアが周縁的な地理的特性があったこと、またイスラームなどの外敵の到来と定着が関係していることが主張されている。第2章では、9世紀から12世紀までのイベリア半島の政治的状況を踏まえた上で、最盛期を迎えたサンティアゴ巡礼の様相、マタモロス（モーロ人殺し）伝説の形成、聖母マリア崇敬の台頭が論じられている。第一区分では聖ヤコブ崇敬の黎明期、そして高揚期から斜陽期へと移り変わっていく様子が示されている。

第二区分は大原氏の第3章「後期中世におけるカスティーリャ王権と『サンティアゴ政策』の衰退」、第4章「ヌエバ・エスパーニャのサンティアゴ崇敬におけるカスティーリャ貴族同盟の役割」である。第3章は先行研究ではあまり触れられてこなかった中世後期における聖ヤコブ崇敬の衰退期の諸相について明らかにしようとする。ここでは特に王権と聖ヤコブ崇敬との関係に焦点が置かれ、聖ヤコブ崇敬が斜陽化し始めたのはレオン王国とカスティーリャ王国が再統一した1230年であること、その後カスティーリャ王国の優位が確立し、トラスタマラ朝の王が聖母マリア崇敬へと移行した結果、聖ヤコブの伝統が失われていき「長い休眠期」に入ったことが論じられている。第4章では聖ヤコブ崇敬の「暗黒時代」からカトリ

ック両王期の「復興」までを検証している。一見すると復興したかのように見える聖ヤコブ崇敬であるが、聖ヤコブに特化した政策はカトリック両王の崇敬心に起因したのではなく、聖ヤコブ崇敬に関心の高い宮廷権力者の働きかけが影響したものだという。またエルナン・コルテスがヌエバ・エスパーニャで聖ヤコブの加護を前面に出したのは保身のための画策であり、宮廷権力者に対する自らの正当性の主張であった蓋然性が高いとする。つまり第二区分では暗黒期から復興に至ったもの実際には復興期とはいえず、中世の伝統的な聖ヤコブ崇敬はすでに形骸化し、衰退期であったことが示されている。

第三区分は井上氏の第5章「メキシコ征服と聖ヤコブ」、第6章「メキシコ先住民にとっての聖ヤコブ崇敬」である。第5章では史料に記された聖人出現の場所や回数等に着眼点が置かれた従来の研究に疑問を呈し、新大陸征服期の聖ヤコブ顕現をクロナカ等で精査し、史料が史実としての顕現譚を作り上げてきた側面を提示する。第6章では、征服戦争において聖ヤコブの聖人像がマタモロスからマタインディオス（インディオ殺し）へと変容しながらも、マタモロスが一般的に聖ヤコブ崇敬として先住民に受容され、定着していった背景に迫っている。この第三区分は転換期にあたり、イベリア半島で失われつつあった聖ヤコブ崇敬が新大陸に伝播し、本来の伝統を保持しながら発展し普及していった過程が示されている。

このようにイベリア半島と新大陸という広大なフィールドを視野に入れて、聖ヤコブ崇敬を一つの軸として辿ることによって、その崇敬が歴史的影響力のあった人物たちの手中で展開しながら、スペインとラテンアメリカの共通の文化事象として成り立っていった軌跡が明らかになる。スペイン史とラテンアメリカ史の分野の垣根を超えた本書は、著者が希望する両研究分野における相補連携のきっかけを生む書になるであろう。

(ふくち・きょうこ 琉球大学准教授)

【学会等報告1】

東京スペイン語学研究会——最近10年間の活動を振り返って——

松井 健吾

今回、筆者が庶務を務める東京スペイン語学研究会（Círculo de Estudios Lingüísticos Hispánicos de Tokio: CELHT）の活動報告というテーマでエッセイを書く機会を与えていただいたのだが、1975年の創立当初からの活動を振り返るにはあまりに歴史を知らな過ぎるので、庶務の任に着いた2013年度以降の期間について記すことにする。ちなみに、CELHT創立の首唱者は故原誠氏であったことが『東京外国語大学史—独立百周年（建学百二十六年）記念—』（1999）にある個別史「スペイン語」の項に記されている。また、設立の経緯と当初の活動の様子については原氏自身が日本ロマンス語学会誌『ロマンス語研究』13/14号（1981）に寄せた書評に詳しい。

さて、本会にはスペイン語教育も含め広くスペイン語学研究を志す者が集い活動している。活動の柱は定例研究会の開催と機関紙『スペイン語学研究』の発行（1986年創刊、年刊）である。定例研究会は月に1回の頻度で開いているが、夏には姉妹関係にある関西スペイン語学研究会（Círculo de Lingüística Hispánica de Kansai: CLHK）との合同合宿で「スペイン語学セミナー（Seminario de Lingüística Española de Japón: SELE）」を開催するため8月は休会としている。会員の大半は首都圏の大学教員と大学院生で、近年の実質会員数（=会費納付者数）は

60名弱である。定例研究会には毎回20名前後が出席していて、非会員でも自由に参加することができる。例会では基本的に1回に1人の発表者を立て、最長で2時間ほどを目処に口頭発表と質疑応答が行われる。開催日時と場所は発表者の特段の希望がなければ、月末の土曜午後4時から東京外国語大学スペイン語共同研究室にて、というのが慣例となっている。また、12月例会はたいい「修士論文発表会」として学位論文の提出を控えた大学院生らに発表してもらっている。筆者がその1人として臨んだ2004年には他に5人もの発表者がいて半日掛かりでの開催となった。忍耐強く付き合い叱咤激励してくださった参加者の方々への感謝の念に堪えない。そして個人的な見解ではあるが、本会活動の3つ目の柱として例会後の打ち上げ（懇親会）を挙げたい。そこでは例会での議論の続きが繰り広げられることもあればスペイン語学に限らない多種多様な話題が飛び交う。教場や例会ではなかなかお目にかかることができない研究者たちの一面を垣間見することもできる。研究会が持つもう1つの魅力だ。そして年末の打ち上げは忘年会である。とくに修士論文発表会の年ともなれば、院生の健闘を称えつつ1年の活動を総括するかたわら、彼らの発表が聴衆を初心に帰らせ、研究の原点を顧みるのである。

2020年、新年最初の月例会を終えると次回は2月29日に予定されていたが、2月と3月の例会は新型コロナウイルス感染症の影響でやむなく休会となった。多くの大学が卒業式、入学式の延期あるいは中止を決定するとともに、新学期の開始時期を遅らせるという通達を出していた頃である。しかしほどなくしてウェブ会議システムの導入が進み、本会でも4月例会をCELHT史上初となるオンラインで開催する運びとなった。誰しもがオンライン授業の準備に追われる中で、オンライン研究会の実現に一役買ってくれた発表者のArturo Varón López氏（神奈川大学）には改めてこの場を借りてお礼申し上げたい。これ以後オンラインでの研究会が続いていて、今年の8月6日には第520回定例研究会を迎える予定だ。またCLHKもオンラインで活動を継続しており、2020年9月からはお互いの定例会のZoom情報をそれぞれのメーリングリストに流し、新たな形での交流を図っている。

このようにオンライン研究会になることで金沢や福岡などの遠方にいる研究者はもとより、久しく研究会から遠ざかっていたメンバーも顔を出すようになっていく。オンライン開催はこうしたメンバーの参加を促しているのは確かであるが、全体の出席者数は対面時とほぼ変わっておらず、コロナ禍後の開催方法を考える上では悩ましい結果となっている。例会後の打ち上げについては、オンライン研究会を始めてからしばらくの間、発表後にZoomミーティングを開放して自由に利用できる場を設けたものの、次第に集まりが悪くなり1年も経たないうちにやめてしまった。しかしながら、昨年と一昨年の12月例会後にオンライン忘年会の開催を試みたところそれなりに盛り上がり、後日メーリングリストでその場での議論を補足する投稿が流れるほどであった。

SELEについても触れておくと、2020年はCELHTが幹事となっていた（筆者が世話役を仰せつかっていた）。もちろんオンラインで実施するという選択肢もあったのだが、個人的には対面で行えないのではSELE本来の価値が損なわれるという思いが強かった。全国のスペイン語学研究者が一堂に会して数日に渡り研究発表をし、議論を交わし、存分に語り合えるSELEは、それだけ特別な時間であり場所なのである。最終的にCELHT会員総会の場でSELE2020中止案を諮り了承された。その後、SELEの穴埋めをしたい気持ちもあり、例外的に8月例会を開催した。これも発表者の結城健太郎氏（東海大学）と小橋さおり氏（順天堂大学）のおかげである。翌年になっても感染状況は相変わらずだったものの、この年のCELHT総会では

2年連続で中止にしてしまうよりオンラインでも SELE を続けていくことが重要である旨が確認された。後日 CELHT と CLHK でアンケートを取り、オンライン SELE2021 として 8 月 26、27 日に実施することを決定した。引き続き筆者が世話役を務め、土屋亮氏（亜細亜大学）がその相棒を買って出てくれた。参加者は両日共に延べ 50 名前後を数え、合計 9 件の研究発表が行われた。初日の夜には「ヴァーチャル懇親会」も開き、そこそこの評判を得たようで安堵の胸を撫で下ろした。閉幕後には個別にお礼のメールをくださる方もいて世話役冥利に尽きる思いであった。SELE2021 の実現は土屋氏の協力なしにはありえなかった。記して謝意を表したい。

筆者は 2001 年の東京外国語大学大学院博士前期課程入学とほぼ時を同じくして研究会に入会した。東外大が西ヶ原からキャンパスを移転した翌年のことである。初めてその扉を開いた時、パイプ椅子が所狭しと置かれた部屋に、熱気と知的好奇心にあふれた面持ちの参加者たちを目の当たりにすると、えも言われぬ高揚感に包まれたことを今でも鮮明に思い出す。オンラインでは得難いこうした経験を愛おしく思う気持ちはしかし、今の時世ではひとしおである。

(まつい・けんご 神田外語大学専任講師、CELHT 庶務委員)

【学会等報告 2】

バルセロ、ミロ、ボテロ ～生命の根源からの造形～

木下 亮

ひとりのアーティストに焦点をあてた大規模な個展は贅沢な企てである。しかもここで取り上げる 3 人のうちの 2 人は存命の画家である。当然ながら展示作品の選択をはじめ展覧会の準備は複雑で手間のかかるものとなり、画家本人や家族との交渉には神経を使う。画家の生誕や没後の周年を記念するのではなく、ましてや政治や外交の後押しもないなかで、今回のような国外の現代美術の個展を可能とするのは、企画者による説得力のあるコンセプトと開催実現に向けた情熱であろう。

「ミケル・バルセロ展」(2021/03/20 に国立国際美術館で開幕。その後、長崎県美術館、三重県立美術館、東京オペラシティアートギャラリーを巡回)

ミケル・バルセロ (1957～) はスペインの現存作家のなかで最も評価の高い画家である。

その制作は、絵画にとどまらず、建築的な造形としての天井画や壁画、彫刻、陶器、版画、舞台美術、パフォーマンスと多岐にわたる。いや、多岐なのではなく、彼にとって技法上のジャンルは存在しないのだ。バルセロはマジョルカ出身で、正規の美術教育を完了しないまま、独学の表現者として創作活動を始める。1982年にカッセルの「ドクメンタ7」に出品し、パリにも制作の拠点を置く。1988年はアフリカのマリに滞在し、巨大な陶器制作を始める。代表的な作品ではパルマ大聖堂のサン・ペール礼拝堂 (2007) や、ジュネーヴの国連人権理事会本会議室の天井画 (2008) などが知られている。



図1 《とどめの一突き》1990
作家蔵

本展では初期絵画から最新作まで絵画や陶器など 94 点が展示され、彼の出自を思い出せば海と海の生物を描いた作品や、闘牛を主題とした 2 メートルの大画面（図 1）が目に入ってくる。絵具は塗り重ねられるのではない。絵具はキャンバスに打ち付けられ、したたり落ち、堆積し、ときに重力に逆らって鍾乳石のように垂れ下がる。絶えず動的で饒舌な画面では、類似、象徴、引用、連鎖を探し求める視線が交錯し続ける。事実、画面に塗り込められたバルセロの該博な知識は誰もが認めるどころだという。気構えを感じさせない即興の創作は、常にエネルギーに満ち溢れている。共作のパフォーマンス《パソ・ドブレ》のビデオでは、文字通り土と格闘する姿が印象的である。それは単に身体性を問いかける行為にとどまることなく、生命の根源から生まれ出る造形であることを示すからであろう。

「ミロ展—日本を夢みて」（2022/02/11 に Bunkamura ザ・ミュージアムで開幕。その後、愛知県美術館、富山県美術館を巡回）

ジュアン・ミロ（1893～1983）の長い人生とその画業はこれまで日本で十分に紹介されてきたはずなのだが、本展は新知見に満ちた画期的な展覧会である。ミロはバルセロナで生まれ、20 代後半からパリに滞在し、詩人たちと交流し、ブルトンをはじめシュルレアリストから認められる。スペイン内戦と第二次世界大戦の戦禍を逃れた後は、マジョルカで制作を続け、カタルーニャを体現する画家となる。純化する色彩と記号化するモチーフ、そのリズムカルで詩的な造形は、大戦後の抽象美術の先駆けと評価される。



図 2 《アンリク・クリストフル・リカルの肖像》1917
ニューヨーク近代美術館

ミロは若いときから日本への関心を持ち続け（図 2）、晩年 2 度来日している。本展では資料も含めて 140 点が展示され、ミロの日本滞在を実証的に再現し、日本での体験が彼の作品にどう表出していたのかを示そうという明確な目的が掲げられている。ミロは 1966 年 9 月、73 歳のときに初来日し、世界で初めてミロのモノグラフを著した瀧口修造（1903～79）に会い、画家と日本の詩人との共作が始まる。続いて万博開催 5 か月前の 1969 年 11 月に 2 度目の来日を果たし、大阪万博のガスパヴァイオンのために陶板画《無垢の笑い》の設置を見届け、そのスロープに即興で壁画を制作したのであった。

「ボテロ展 ふくよかな魔法」（2022/04/29 に Bunkamura ザ・ミュージアムで開幕、その後、名古屋市美術館、京都市京セラ美術館を巡回）

フェルナンド・ボテロ（1932～）はコロンビアのメデジン出身で、生地美術を学んだ。さらにヨーロッパに留学後、非日常的なプロポーションの静物や肥大化した人物を描き始める。デフォルメ、強烈な色彩、ユーモアと諷刺がその特徴となり、さらに美術史上の“名画”のパロディー作品が制作される。彫刻作品は、広島市現代美術館の《小さな鳥》（1988）など日本の美術館にも収蔵され、バルセロナ旧市街では巨大な《猫》（図 3）に驚かされる。

もちろんそのユーモラスでほのぼのした造形だけならば、ボテロは世界的な注目を集めることもなかっただろう。その素朴とも見える様式は、美術史におけるオリジナルとコピーの問題を思い出させるのだ。イメージソースなのか、剽窃なのか。単純なデフォルメか、戦略

的なパロディーか。展示された 70 点は、ボテロが生涯貫いたスタイルの意味を改めて問いかける。またボテロが中南米出身のアーティストであることは、現代美術における欧米中心の言説を相対化できる可能性を意識させられるのである。

インターネットで容易く検索できる有名な絵画はアイコン化されて久しい。イメージの伝播は瞬時であり、イメージの再生と共有はすでに前提となっている。しかし巨大な作品を実見することは、アナクロニズムと言われても、忘れていた眼の快樂を取りもどし、自由に作品の印象を言葉に置き換え、さらに画家の造形言語を直に知る機会を与えてくれよう。コロナ禍の制限の多いなかで開催された展覧会だが、個展であればその図録はなおさら受容史的に価値のあるものとなる。今回の展覧会図録はどれも紛れもない労作であることを最後に付記しておきたい。

(きのした・あきら 昭和女子大学特任教授)



図3 《猫》1987
バルセロナ、ラバル地区
(筆者撮影、2016)

【新刊案内】

2021年6月から2022年5月までのスペイン・ラテンアメリカ関係の新刊書です。遺漏があるかもしれません。ご教示願います。

- 『対訳桃太郎ガリシア語』, 外国語学研究会, 2021年6月
- 『高地文明:「もう一つの四大文明」の発見』, 山本紀夫, 中央公論新社, 2021年6月
- 『聖母の美術全史: 信仰を育んだイメージ』(ちくま新書), 宮下規久朗, 筑摩書房, 2021年6月
- 『スペイン内戦と国際旅団: ユダヤ人兵士の回想』, シグムント・ステイン, 辻由美(訳), みすず書房, 2021年7月
- 『メヒコの衝撃 メキシコ体験は日本の根底を揺さぶる』, 市原湖畔美術館(編), 現代企画室, 2021年7月
- 『スペイン語の語源』, 岡本信照, 白水社, 2021年8月
- 『CEFRの理念と現実 理念編 言語政策からの考察』, 西山教行・大木充(編), くろし出版, 2021年8月
- 『CEFRの理念と現実 現実編 教育現場へのインパクト』, 西山教行・大木充(編), くろしお出版, 2021年8月
- 『赤い魚の夫婦』, グアダルルーペ・ネットル, 宇野和美(訳), 現代書館, 2021年8月
- 『先住民のメキシコ—征服された人々の歴史を訪ねて』, 阿部修二, 明石書店, 2021年8月
- 『生きている音楽: キューバ芸術音楽の民族誌』, 田中理恵子, 水声社, 2021年8月
- 『世界大麻経済戦争』, 矢部武, 集英社, 2021年8月
- 『詳説スペイン語文法』, 福寛教隆・フアン・ロメロ・ディアス, 白水社, 2021年9月
- 『ニューエクスプレスプラス ロマ(ジプシー)語《CD付》』, 角悠介, 白水社, 2021年9月
- 『記憶の図書館: ボルヘス対話集成』, ホルヘ・ルイス・ボルヘス/オスバルド・フェラーリ, 垂野創一郎(訳), 国書刊行会, 2021年9月
- 『ベルベル人: 歴史・思想・文明』, ジャン・セルヴィエ, 私市正年ほか(訳), 白水社, 2021年9月
- 『女たちのラテンアメリカ』(上・下), 伊藤滋子, 五月書房新社, 2021年10月, 2022年4月
- 『スペイン史10講』(岩波新書), 立石博高, 岩波書店, 2021年9月
- 『ディエゴ・マラドーナの真実: 追悼・増補版』, ジミー・バーンズ, 宮川毅(訳), ベースボール・マガジン社, 2021年10月
- 『バスク語のしくみ《新版》』, 吉田浩美, 白水社, 2021年11月
- 『TANKA《カタルーニャ語短歌》私語 日本古典文学が海外へ与えた影響の特殊例』, 小林標, 大阪公立大学共同出版会, 2021年11月
- 『復讐の女/招かれた女たち』(ルリユール叢書), シルビナ・オカンポ, 寺尾隆吉(訳), 幻戯書房, 2021年11月
- 『カリブ海アンティル諸島の民話と伝説』, テレーズ・ジョルジェル, 松井裕史(訳), 作品社, 2021年11月
- 『貝殻が語る環境と人—ペルーの海と先史時代の漁撈民』(ブックレット《アジアを学ぼう》)

別巻 26), 荘司一歩, 風響社, 2021 年 11 月

- 『聾啞の天才画家エル・ムード』, ローズマリー・マルケーイ, 鈴木光雄 (訳), 文芸社, 2021 年 11 月
- 『小鳥たち マトゥーテ短篇選』 (はじめて出逢う世界のおはなし), アナ・マリア・マトゥーテ, 宇野和美 (訳), 東宣出版, 2021 年 12 月
- 『蛇口 オカンボ短篇選』, シルビナ・オカンボ, 松本健二 (訳), 東宣出版, 2021 年 12 月
- 『スペインの歴史的現実』, アメリコ・カストロ, 本田誠二 (訳), 水声社, 2021 年 12 月
- 『「トルコ人」たちの百五十年: 中東とラテンアメリカを結ぶ』, 飯島みどり (編著), 影書房, 2021 年 12 月
- 『アンデスの考古学 新版』 (世界の考古学 1), 関雄二, 同成社, 2021 年 12 月
- 『日本の国際協力 中南米編: 環境保全と貧困克服を目指して』, 松下冽ほか (編), ミネルヴァ書房, 2021 年 12 月
- 『おとなってこまっちゃう』, ハビエル・マピカ, 宇野和美 (訳), 偕成社, 2022 年 1 月
- 『19 世紀スペインにおける連邦主義と歴史認識—フランシスコ・ピ・イ・マルガルの生涯とその思想—』, 菊池信彦, 関西大学出版部, 2022 年 1 月
- 『「その他の外国語文学」の翻訳者』, 白水社編集部 (編), 白水社, 2022 年 2 月
- 『火をぬすんだウサギーアルゼンチン ウィッチーのおはなし—』, 宇野和美 (再話), 玉川大学出版部, 2022 年 2 月
- 『オルテガ 大衆の反逆: 真のリベラルを取り戻せ』, 中島岳志, NHK 出版, 2022 年 2 月
- 『ザ・コーポレーション: キューバ・マフィア全史』 (上・下), T・J・イングリッシュ, 峯村利哉 (訳), 早川書房, 2022 年 2 月
- 『それはカリブ海から始まった: アメリカ外交の原点』, 玉城武生, 2022 年 2 月
- 『古代インカ・アンデス不可思議大全』, 芝崎みゆき, 草思社, 2022 年 2 月
- 「聖ヤコブ崇敬とサンティアゴ巡礼—中世スペインから植民地期メキシコへの歴史的つながりを求めて」, 田辺加恵・大原志麻・井上幸孝, 春風社, 2022 年 3 月
- 『大胆不敵な教育改革』, フェルナンド・M・レイマーズ (編著), 鈴木寛・山中伸一 (訳監修・著), 岩淵和祥 (訳), 日本文教出版, 2022 年 3 月
- 『遙かなる隣国ペルー 修交 150 周年 太平洋が繋ぐ戦略パートナーシップ』, 片山和之, 東京図書出版, 2022 年 3 月
- 『古代アンデスにおけるワリ国家の形成 小集落からみた初期国家の出現過程』, 土井正樹, 臨川書店, 2022 年 3 月
- 『アンデス文明ハンドブック』, 関雄二 (監修), 山本睦・松本雄一 (編), 臨川書店, 2022 年 3 月
- 『イースター島不可思議大全: モアイと孤島のミステリー』, 芝崎みゆき, 草思社, 2022 年 3 月
- 『本気で学ぶスペイン語 [音声 DL 付]』, 佐竹謙一, ベレ出版, 2022 年 4 月
- 『翻訳と通訳の過去・現在・未来 ~多言語と多文化を結んで~』 (南山大学地域研究センター共同研究シリーズ 13), 泉水浩隆 (編), 三修社, 2022 年 4 月
- 『スペイン新古典悲劇選』, 富田広樹, 論創社, 2022 年 4 月
- 『スペイン語で辿る日本人の死生観—蜘蛛の糸・城の崎にて他 6 編—』, 伊藤昌輝, フェルナンド バルボサ (監修), 大盛堂書房, 2022 年 4 月

- 『スペイン・ポルトガル史』(上・下) (YAMAKAWA Selection), 立石博高 (著, 編), 山川出版社, 2022 年 4 月
- 『米墨戦争とメキシコの開戦決定過程: アメリカ膨張主義とメキシコ軍閥間抗争』, 彩流社, 牛島万, 2022 年 4 月
- 『新・スペイン人が日本人によく聞く 100 の質問』, 瓜谷望・瓜谷アウロラ, 三修社, 2022 年 5 月
- 『リャマサーレス短篇集』, フリオ・リャマサーレス, 木村榮一 (訳), 河出書房新社, 2022 年 5 月
- 『コスタリカ伝説集』, エリアス・セレドン, 山中和樹 (訳), 国書刊行会, 2022 年 5 月
- 『図説スペインの歴史』(ふくろうの本), 立石博高・黒田祐我, 河出書房新社, 2022 年 5 月
- 『ボリビア開拓記外伝: コロニアオキナワ 疫病・災害・差別を生き抜いた人々』, 渡邊英樹, 琉球新報社, 2022 年 5 月
- 『インディオの聖像』, 立花隆, 文藝春秋, 2022 年 5 月

【2022 年度日本イスパニヤ学会奨励賞】

2022 年 7 月 24 日の第 2 回理事会において、「日本イスパニヤ学会奨励賞規定」に従い、機関紙編集委員会から本件についての検討が要請され、その後理事会でメール審議が行われました。その結果、和田瞳氏の論文"La diversidad lingüística y sociocultural en los libros de texto de ELE: un estudio cualitativo sobre los manuales usados en los centros de bachillerato japoneses"が高く評価され、2022 年度日本イスパニヤ学会奨励賞の授与が決定しました。

【『HISPÁNICA』編集委員会より】

『HISPÁNICA』第 67 号の原稿を募集しています。論文・研究ノート・書評を投稿規定に遵い、2023 年 3 月 1 日から 31 日 (31 日消印有効) の期間内にご投稿ください。

(送付先)

日本イスパニヤ学会事務局

〒170-0013 東京都豊島区東池袋 2-39-2-401

(株)ガリレオ 学会業務情報化センター内

多くの会員からのご投稿をお待ちしております。

【理事会より】

教育職員免許状における「外国語（イスパニア語）」及び「外国語（スペイン語）」の取扱いについて

本学会の会員のみなさんの中には、学部で教育職員免許状（以下、免許状）「外国語（スペイン語）」あるいは「外国語（イスパニア語）」を取得した方がいらっしゃると思います。この「外国語（スペイン語）」あるいは「外国語（イスパニア語）」という名前のついた第一種教員免許状を持った方が大学院に進学し、さらに同科目の専修免許状を取得しようとしたとき、これまで次のような問題がありました。

それは、例えば A 大学の学部で「外国語（スペイン語）」という教科名の免許状を取得した人が B 大学の大学院で「外国語（イスパニア語）」という教科名のついた免許状を取得しようとした場合（教科名については逆の場合もあります）、学部で取得した免許状の教科名と大学院で取得しようとする免許状の教科名が異なっているため、専修免許状は授与されないという不都合が生じていたという問題です。本件については、本学会の会員の中に該当者がおり、その方が当時の理事のおひとりに相談したことから発覚したのですが、その後当時の理事のみなさま、とりわけ、木村琢也前会長のご尽力により、無事、「課程認定上の教科「外国語（イスパニア語）」及び「外国語（スペイン語）」を同一の免許教科とし取り扱うこと」という形で解決されることになりました。今回明らかになった問題は東京都教育委員会とのやり取りの中で生じたものですが、同様の問題は他の地域の教育委員会でも起こる可能性があります。そのような場合には、ぜひこの東京都教育委員会において決定された教科名の取扱いを前例として提示していただきたいと思います。きっと問題解決の一助となるはずです。

（会長 山村ひろみ）

【編集後記】

会報 29 号をお届けします。今回も予想を上回る多くの原稿をお寄せいただきました。投稿者のみなさまには心よりお礼申し上げます。

本学会の会長（2006-07）を務めた高橋覚二先生が 4 月にお亡くなりになりました。ご冥福をお祈りします。今号に追悼文を 2 編投稿いただきました。先生の言語学におけるご業績を知り、その温かいお人柄を偲ぶことができることと思います。今後の研究・教育活動への貢献をお誓い申し上げたいものです。

また、今号では例年にない「理事会より」という報告を掲載しました。この件はスペイン語教育にとって大きな不利益問題ですが、最終的に解決できて何よりです。「スペイン語」と「イスパニア語」の意は、我々会員にとっては自明のことではありますが、世間一般では必ずしもそうではないことを再認識させられました。

今年度はコロナ禍 3 年目となっています。本会の年次大会も 2 年連続でオンライン開催となりましたが、今年 22 年度大会は（この会報の締め切り時点では）何とか 3 年ぶりの対面開催となりそうです。Zoom 開催であってもそれぞれの学術テーマについて議論ができることを我々は学びました。しかし、双方向性や即時性に関しては対面形態に明らかに利があります。実りある大会になることを念じております。

（広報委員長 仲井邦佳）